

十九世紀末合衆国借地諸關係の発達

——その歴史的意義に関する覚書——

東 井 正 美

一

アメリカ農業における資本主義発達の画期は、南北戦争である。南北戦争を画期として、資本は、急速に農業をつかみつつあつた。これは、一般経済史家たちによつて、通常「農業革命」と呼ばれている。そしてまた、この資本主義的農業発展の型は、アメリカ型の道としてひろく知られている。

このようなアメリカ農業における資本主義の急速な発達のなかで、アメリカ借地農の顕現および発達の明白な現象が現れたのである。

アメリカ合衆国においては、この国の土地所有および土地諸關係に関する最初のセンサスは、一八八〇年になされ、公表されたのである。そしてこの小作統計は、一八八〇年合衆国総農場数（農場数と農業経営者数とは一致）のうち借地農場数の占める百分比が二五・六％であることを、明らかにした。この年以來、一〇年目毎になされたセンサスは、借地農の増加傾向を示したのである。表示してみれば、第一表のごとし。

アメリカ農業における資本主義發達の画期は、南北戦争である。南北戦争を画期として、資本は、急速に農業をつかみつつあつた。アメリカのセンサス資料によれば、「南北戦後の十九年間に、農家戸数は一八七〇年の二六六万から一八八〇年の四〇〇万九千に増加し、その耕地面積は四億七七〇万エーカーから五億三六一〇万エーカーへ、

第一表 19世紀末借地農(クロッパーを含む)
増加のすう勢：合衆国

地帯別	年別	1880	1890	1900	1910	1920
アメリカ合衆国		25.6	28.4	35.3	37.0	38.1
北	部	19.2	22.1	26.2	28.2	28.0
南	部	36.2	38.5	47.0	49.6	49.6
西	部	14.0	12.1	16.6	14.0	17.7

えんは、ここにある。

二

このように、合衆国借地諸關係は、南北戦争以降アメリカ資本主義的農業の發展途上において、明白に顕現し發達したのである。しかれば、かかる借地諸關係の顕現および發達の明白なる現象は、歴史的段階との関連において、いかなる意義をもつのであろうか。これが本論文の課題である。そしてこれは、アメリカ農業における資本主義發達の研究の一環としてとりあげられたことは、いうまでもない。

本稿の意図は、アメリカ型の資本の農業把握(または資本の土地所有形態の改造)のなかで、換言すればアメリカ型農業における資本主義發展の特殊性のなかで、十九世紀末合衆国借地諸關係の明白なる顕現および發達の歴史的意義を検討しようとなすことにある。そして本稿は、拙稿「一九世紀末合衆国借地諸關係發達の歴史的意義について」(関西大学論集、第六巻第四号)の続稿をなす。なお本稿では、主題の歴史的意義についての予備的研究であつて、将来の礎石としたい。あえて覚書としたゆ

十九世紀末合衆国借地諸關係の發達（東井）

三四

と、約一億三千万エーカー増加した。一八七〇年から一九〇〇年の期間に、農家総数は、二倍以上増加して、一九〇〇年の五七三万七千戸となり、その耕地面積は、四億三千万エーカー増加して、一九〇〇年の八億三八六〇万エーカーとなった。（〈Abstract of the Fifteenth Census of the United States〉, Washington 1933, P. 507-508, 517-518.）

最も重要な食糧作物（小麦、裸麦、トモロコシ、燕麦、大麦）の作付面積は、一八六六年の五五六一万三千エーカーから一八八〇年の一億二〇七六万三千エーカーへ、すなわち十五年間に二倍以上に、増加した（〈Agricultural Statistics〉1937, P. 9, 31, 51, 61 により作成⁽¹⁾）。

このように南北戦争を画期として急速に發達した資本が、發展当初歴史のうちに見いだした土地所有形態は、他の先進諸国が見だした土地諸關係の古い形態——封建的地主的土地所有、農民的共同体的土地所有、民族的土地所有、等々——ではなかつた。

リヤンチェンコが、彼の著「マルクス主義農業経済学」においていつているごとくに、「北アメリカ合衆国における土地諸關係および農業組織は、この国の全歴史を通じ、その植民および植民地的發展の一般的諸条件との連関において形成された。ヨーロッパはこの地に多数の種々雑多の国民の代表者を投げだし、彼等が故郷でもつていた種々の農業生活、種々の農業組織をここに移した。だから最初は、合衆国の土地諸關係は或る部分はイギリス的な（特権的大土地所有、資本主義的借地農業者の借地、限嗣相続（entails）に関する法律その他）或る部分はフランス的な、極めて多種多様の制度の混合物であつた。それにも拘わらず、新しい經濟環境と新しい經濟的諸条件の下においてこれらの古いヨーロッパの土地諸關係は急速に廢れて、全然新たな發達を遂げるに至つた。農業組織のこの新たな傾向を決定した諸特性は、自由な肥沃な広大な土地を有し、新しい人口、新しく安い勞働力のみならず、

新らしい生産手段および資本が不断に急速に流入する、この國の發達の一般的植民地的性質と、これらの諸条件下で作り上げられた文化および企業的精神の高い水準とである。

現代農業組織の發端および土地諸關係の新らしい時代は、本質的には、植民地としての各州の、以前の本国であるイギリスからの、分離の時代に始まつている。独立の經濟的發達のために成熟し、急速に全資本主義的經濟を取り入れた合衆國は、その土地諸關係を改造しはじめ、これらの諸關係をばその經濟的發達の急速なテンポに順応せしめた。土地の世襲および限嗣相続の形態で残つていたイギリス的な『貴族的』土地制度の殘存物は、既に十八世紀の終りに大多數の州において廢棄されていた。独立國家および統一の連邦の形成以後は、この新たな政治的統一は新たな土地所有諸条件のうちに自己の經濟的土台を見出した。この土地所有は、新らしい土地とその占有の上で行われる急速な經營上の擴張とに立脚するところの、急速にして『自由な』經濟的發達の新たな諸要求に適合した一様な組織を与えられた⁽²⁾。

アメリカ農業資本がその成立期に見だした土地所有形態は、一般的にいえば、自作農民的土地所有制であつた。アメリカにおける典型的な農民は、自作農民であつた。

この自作農民は、レーニンがアメリカ資本主義的農業發達の基礎として評価したところの、「自由な土地における——一方では、あらゆる中世的な束縛から、農奴制度と封建制度から自由な、他方では、私的土地所有の束縛から自由な、——そういう自由な土地における、自由な農業企業家⁽³⁾」(レーニン「十九世紀末ロシアにおける農業問題」)に、まさに転化しようとしていた農民であつた。けだし、アメリカ農業資本がもつとも急速にして自由な道を切開いた画期——南北戦争以前には、アメリカ農民は、古くから植民された地方および南部の棉、タバコ地域においての

局部的商業的農業の發達を除いては、一般的にいえば自給自足的穀をまもつていたのである。

この獨立農民は、範疇的にいえば割地農民ではあるが、マルクスがわざわざことわつていふごとくに、「近代的諸国民のもとでは、封建制的土地所有の解消から生ずる諸形態の一つとして見出す、自營農民の自由な分割地所有というこの形態、例えば「イギリスのヨーマンリー〔自營農民層〕、スウェーデンの農民身分、フランスや西ドイツの農民」とは、別の条件のもとで發展したのである。⁽⁴⁾この獨自性は、辺境に自由にして豊富な公有地の存在という要因によつてつくりだされたものである。そしてこの獨自性によつてうらづけられることは、アメリカの典型的な農民たる自作農民は、自由な土地における——一方では、あらゆる中世的な束縛から、農奴制度と封建制度から自由な、地方では、私的土地所有の束縛から自由な、——そういう自由な土地における、自由な農民であつたのである。このような合衆国の典型的な農民の獨自性については、日高明三氏が彼の著「ジャクソニアン・デモクラシー」において明らかにする。長いが引用しておこう。

「フランス自營農民があたえられた主権を放棄して一人の主権者を作つたとき、われわれの自營農民は當時の世界に比類ないデモクラシーを作つている。この絶大な差異を生ましめた要因は何か？重ねて言おう、それは辺境である。

刻々に西漸し、拡大する辺境の存在のゆえに、西部農民は狭小な地域に堆積される恐れがなかつた。

「かれらの農地はかれらの孤立をまねかないで自由と平等と獨立とをもたらし、かれらの解放と致富との地盤になる。かれらは東部の資本にたいして負債者の地位にあるが、資本はかれらを最後まで吸血することはできない。辺境はかれらに無限の逃避所をひらきあたらしい自由を保証する。再生する辺境は再生する不羈獨立を伴い、辺境の物質的生活はビュリタンの精神の傾向をつよめ、かくて西部農民の社会には強烈なデモクラシーが支配する、分割地農民は時とともに零細化する地片にしがみつき、帝國復古の夢魔にとりつかれた孤立の『保守派』であり、自由と獨立とを戦いとらんとして都會の勞働者と協力しよ

うとは夢想だにしないが、西部農民は辺境的社会的の物質的精神的共通性のもとに一体化し、さらにすすんで東部の被抑圧階級と協力しこれを指導する『進歩派』としてあらわれる⁽⁵⁾。』

このような自由に土地における——一方では、あらゆる中世的な束縛から、農奴制度と封建制度から自由な、他方では、私的土地所有の束縛から自由な、——そういう自由な土地における、自由な農業企業家たる自作農民が、アメリカ農業における資本主義がその成立当初にでくわした典型的な農民であつたのである⁽⁶⁾。しかしながら、借地農が全然いなかたかといえ、そうではない。

「ニューイングランドの田紳は、紳士的な態度で、歎待的で、氣持のいい作法で、彼等のエステイトに徒食して暮すことができる。というわけは、生活必需品の豊富さは、家計をいぢるしく楽しくしており、彼等が所領地のうち貸与した部分によつてえられる地代の小額なることを埋合せてくれるからである。この事情は、すべての者が未占有地に自ら農業者として植民することの容易さによる。これは、小作農を少くする。というわけは「農場に家畜を入れるに十分なお金をもつ人たちは、他の農場の小作人である場合よりもより有望であるところの、一連の荒蕪地を開拓するに十分である。かかる事情は、その土地で小作人になることを妨げると、人は想像するであろうが、これは事実ではない。低い地代および偶然的な出来事は、時には植民することよりもむしろ暮すことに彼等をいざなうであろう。』しかし概して、ニューイングランドでは小作農は一般的ではない。オーヴァシアーズの経営下にあるエステイトの方が、小作農に貸与しているエステイトよりもずつと多いのである⁽⁷⁾。」

これは、一アメリカ人「アメリカの農業」(American Husbandry by an American, 1775)中の一文である。そして「」内は、ヘンリー・C・テイラー(Henry C. Taylor)によつて、彼の著「農業経済学概要」(Outlines of Agricultural Economics)のなかに引用されている⁽⁸⁾。この一文によれば、古くから、ニューイングランドに小作農がいたことは、あきらかである。そしてこの小作農の發生の根柢は、地代の低廉さおよび偶然の出来ごとによるもの

である。かかる發生の根柢をもつ借地農が、古い植民地時代において、広大な未占有地の存在にもかかわらず、いたからといつて不思議ではない。

たしかに、南北戦争以前に借地農は、数的比重はあきらかではないが存在していた。テイラーは、一八八〇年以前におけるアメリカ小作農について、その時代の文献をせん索してこれらの実証的研究をなしている。この実証的研究によれば、十八世紀には、ニューイングランドやペンシルヴェニアに、イギリス型の田紳およびイギリス型の小作農の存在したことは明白である。「『田紳』がいたことは小作農がいたことよりもよりはつきりとしていることがあきらかであるが、アメリカにはアメリカの生誕以来小作農がいた」のである。一八八〇年以前に、モオゼス・グリーンリーフ (Moses Greenleaf) がメイーンの調査において、分益農の色々の形態について書いており、「十九世紀のいつの時代にも、アメリカ合衆国の若干の地方に小作農が見だされなれないというこは、決してなかつた」。合衆国において小作農が存在していたことの、他のいくつかの例がある。

このように、テイラーの実証的研究によつて、早くも十八世紀半頃には、小作農の存在が明白に確認されうる。しかしこれらの小作農は、もつとも早く植民された地方、ニューイングランド、メイーン、メリーランド、デラウェア、ニュージャージーなどにかぎられていた。もつとも、十九世紀半頃には、アイオワ、イリノイスなどにも小作農が存在していた。そおじて、アメリカにおける小作農は、南北戦争以前では、古く植民化された地方にかぎられていたようである。ともあれ、アメリカでは、南北戦争以前にも、数的比重はあきらかではないといえ、小作農が存在していたことは、たしかである。

アメリカの植民時代における小作農については、N・S・B・グラスも書いている。

「植民地時代においてさえも、或る程度の地主的所有制が徐々に形成されていた。たとえばニューイングランドにおいては、地主の中にはその所有地の一部を自分で耕作し、残りの土地を賃貸契約のもとに小作に出している者もあつた。フィラデルフィア (Philadelphia) の周辺には借地農業者がいたと記録されてもいるから、当然地主がいたわけである。ワシントン (Washington) やモリス (Morris) のようなアメリカ連邦 (Federation) の父と云われる人々、またさように公的には知名でない、その他の多くの富裕な人々が、投機のためにどれだけ西方の土地を買い上げたか、また耕作者にどれだけ小作に出したかと云うことは、今日正確に知ることはできない。しかし、徐々に、少なくとも十九世紀の初期には借地農業者に小作させることを目的とする大農場が生れ、そして云うまでもなくそれ以来今日に引きつづいているのである。ニューヨーク州のジェネシー (Genesee) 河流域にあるワズワース大農場 (Wadsworth estate) は、中世部にあるスカリイ大農場 (Scully estate) と同様に、一つの有名な事例である。前者は既に社会的に有名であつた一家族によつて所有されたが、後者はそれによつてひき起された社会的反対のために有名になつたのである。」⁽¹⁹⁾と。

かくして、南北戦争以前に、アメリカには借地農が存在していた。そしてこの借地農の数的比重は、つまびらかではない。しかしアメリカにおける地主制は、広大な未占有地の存在によつて、さほど成長したとは思われない。そしてまた、これらの借地農の存在は、もつとも早く植民された地方 (例えば十八世紀半頃からの) ニューイングランド、メイン、メリーランド、デラウェア、ニュージャージー、(十九世紀半頃には) アイオワ、イリノイスなどの地方の、範囲外にでるものではなかつた。

だから、アメリカ資本主義的農業生産が発展当初見だした土地所有形態は、例外的には、地主制、一般的にしてかつ典型的には、自作農民的土地所有制であつた。もつとも、これらの土地所有形態とは別に、アメリカ南部には奴隸制プランテーション制があつた。

アメリカでは、資本が土地所有形態を自己に適應さず改造は、「南部諸州の奴隸所有者経営にたいして暴力的に行われた。ここでは、暴力は農奴主的地主にむかつてもちいられた。彼らの土地は分割され、土地所有は封建的大土地所有からブルジョア的小土地所有に転化しはじめた。ところで、アメリカの大量の『自由な』土地にたいして、新しい生産様式のための（すなわち資本主義のための）新しい土地制度をつくり出すというこの役割をはたしたものは、『アメリカの黒い割替』、四〇年代の地代撤廃期成運動（Anti-Rent, Bewegung）（一八四〇年から一八五二年ごろまで、ニューヨーク州を中心に行われた穩健な地代不払の農民運動）、ホームステッド法（一八六二年の法律によつて、アメリカの市民はみな、国家から無償あるいはごくやすい価格で、一六〇エーカー（六五町歩余）までの土地（ホームステッド）を入手する権利をあたえられた。おそくとも五年後には、その土地は占有者の所有となつた。』などであつた。ドイツの共產主義者ヘルマン・クリーゲが一八四六年に、アメリカにおける土地の均等割替を説いたとき、マルクスはそのえせ社会主義のエス・エルの編見と俗物理論とをあざわらつたが、しかし彼は、アメリカにおける生産力發展の利益、資本主義の利益を進歩的に表現する運動として、アメリカの土地所有反對運動の歴史的意義を評価した」（レーニン「一九〇五—一九〇七年のロシア革命における社会民主党の農業綱領」、以下『農業綱領』と略す）⁽¹¹⁾。

アメリカにおけるこの「改造」この「役割」は、「農業へ自由に資本をもちいるのを妨げ、資本が一つの部門から他の生産部門へと自由に移動するのを妨げるいつさいの障壁」の除去に役立ち、アメリカ農業における資本主義は、「南北戦争」後急速に広汎に發達したのである。そしてこの發展の型をレーニンはアメリカ型の道と名づけたのであり、この進化のこのような道は、「生産力のもつとも急速な發展、住民大衆にとつてもつとも良い労働条件、自由な農民が農業家に転化するもつとも急速な資本主義の發展を意味するであらう。」⁽¹²⁾この基礎

となつたのは、「自由な土地における、自由な農業企業家の自由な経営であつた。アメリカでは、土地はその広大な予備から名目だけの価格で分配された。そして、いまや、そこでは、新しい、まったく資本主義的な基礎のうえにはじめて土地私有が発達した」⁽¹³⁾（「十九世紀末ロシアにおける農業問題」）。

さて、このようなアメリカ農業における資本主義の急速な発達のなかで、明日に顕現し発達した十九世紀末合衆国借地諸関係の歴史的意義をどのように評価したらよいのであろうか。この課題の解明は、以上の叙述からえられた次の二点を前提とし、その二点から出発する。

先ず第一点、南北戦争を画期として急速に発達したアメリカ資本主義的農業の基礎となつたのは、自由な土地における——一方では、あらゆる中世的な束縛から、農奴制度と封建制度から自由な、他方では、私的土地所有の束縛から自由な、——そういう自由な土地における、自由な農業企業家の自由な経営であつた。そしてこのような自由な農業企業家は、アメリカの典型的な農民——自作農民であつたのである。

第二点、アメリカには、南北戦争以前にも限られた範囲内で借地農がいたのである。このような借地農の存立の基礎は別として、この存在の意義は、本稿での主題の歴史的意義と切離さなければならぬ、けだし、これらの借地農は、広大な未占有地で独立農民が絶えず発生しつづあるときに、かつ自給自足的なアメリカ農業のうちに現れたのであり、主題の十九世紀末借地諸関係の明白なる現象は、アメリカ資本主義的農業の急速な発達のなかに現れたからである。いいかえれば、一つは資本と関係のない借地農であり、他は資本と関連のある借地農であるからである。だから、この点において、両者は切離すべきであつて、南北戦争以前の借地農は、ここで切捨てておく。

註 (1) エル・イー・リュボシツツ、農業恐慌理論の諸問題、八六—七頁。

(2) リヤシチエンコ著、直井武夫訳、マルクス主義農業経済学、上巻、二六九—二七一頁。

十九世紀末合衆国借地諸関係の発達(東井)

四二

- (3) レーニン、「十九世紀末ロシアにおける農業問題」マルクスレーニン主義研究所訳、レーニン全集、第十五巻、大月書店刊、一二三頁。
- (4) 長谷部文雄訳マルクス資本論、第三部、青木書店、一一三六頁。
- (5) 日高明三著、「ジャクソンニアン・デモクラシー、——独立自営農民の政治像——」、一七二—三頁。
- (6) レーニン「一九〇五—一九〇七年のロシア革命における社会民主党的農業綱領」(以下「農業綱領」と略す)、レーニン全集、第十三巻、二二三頁。
- (7) *American Husbandry*, Edited by Harry J. Carman, 1939, P. 48.
- (8) Henry C. Taylor, *Outlines of Agricultural Economics*, 1949, P. 290.
- (9) *Op. cit.*, pp. 287-300.
- (10) N. S. B. グラース著、三橋時雄・本岡武訳、アメリカ農業史、三〇—三二頁。
- (11) N. S. B. Gras, *A History of Agriculture in Europe and America*, 1940, pp. 268-269.
- (12) 同書、二五一頁。
- (13) レーニン全集、第十五巻、一二三頁。

三

アメリカ農業における資本主義は、南北戦争を画期として、急速に発達した。この発展途上において、アメリカ借地諸関係は、明白に顕現し(一八八〇年)、発達した(一八八〇年以降)のである。ならば、この借地諸関係の明白なる顕現および発達は、これの歴史的段階との関連において、いかなる意義をもつのであろうか。

はじめに、十九世紀末合衆国借地諸関係の顕現および発達についての、具体的な内容的内容を、地帯別に、確認し

第二表 世帯別借地農場比率の変動
1880—1920：合衆国

	1880	1890	1900	1910	1920
合 衆 国…	25.6	28.4	35.3	37.0	38.1
ニューイングランド地方…	8.5	9.3	9.4	8.0	7.4
中部大西洋岸地方…	19.2	22.1	25.3	22.3	20.7
東 北 中 央 部 地 方…	20.5	22.8	26.3	27.0	28.1
西 北 中 央 部 地 方…	20.5	24.0	29.6	30.9	24.2
南 部 大 西 洋 岸 地 方…	36.1	38.5	44.2	45.9	46.8
東 南 中 央 部 地 方…	36.8	38.3	48.1	50.7	49.7
西 南 中 央 部 地 方…	35.2	38.6	49.1	52.8	52.9
山 地 地 方…	7.4	7.1	12.2	10.7	15.4
大 平 洋 岸 地 方…	16.8	14.7	19.7	17.2	20.1

ておこう。合衆国地帯別借地農比率の変動（一八八〇—一九二〇年）を表示すれば、第二表のごとくである。

第二表によれば、借地農の増加のもつとも顕著であつたのは、南部地方であつた。次いでもつとも顕著であつたのは、西北中央部地方であつた。この地方では一八八〇年には、二〇・五%、一八九〇年には、二四・〇%（前年に比べて、三・五%増）、一九〇〇年には、二九・六%（五・六%増）、一九一〇年には、三〇・九%（一・三%増）、一九二〇年には、三四・二%（三・三%増）であつた。これに次いで、東北中央部地方が、顕著であつた。これら両地方の借地農は、普及率において南部地方を除いた諸地方をりよおがし、一貫して増加している。これら北中央諸州における借地諸関係の發達は、次の事情を考慮すると、より明白となるであらう。合衆国の不動産抵当負債の最高を示したのは、（一八九

〇年）、ニューヨーク（中部大西洋岸地方）、アイオワ（西北中央部地方）、イリノオイス（東北中央部地方）、カンサス（西北中央部地方）、オハイオ（東北中央部地方）、ペンシルヴェニア（中部大西洋岸地方）の六州であつたのであり、これら諸州における総不動産抵当負債は、五五三、九六四、五九四ドル、換言すれば合衆国総不動産抵当負債のうち五一%を占めていた。このように、東北、西北中央部地方における不動産抵当負債の高率であることは、地代集積の明白な過程の現れでもあり、土地所有農業企業者の土地所有および企業家なる二人の個人への分離過程が促進さ

れつつあることの現れである。だから、かかる不動産抵当負債の高額なることは、土地所有の個人の経営からの分離において借地と同一方向への運動速度を強めていることにほかならない。しかして、東北・西北中央部地方における借地諸關係の顕著な發達は、借地農場比率表（第二表）に表れたより以上に顕著なものであることが、明白であるであらう。

すでにみたごとく、アメリカ資本主義的農業生産が發展当初見だした土地所有形態は、例外的には地主制、一般にかつ典型的には、自作農民的土地所有制であつた。他に、これとは別に、南部には、奴隸制プランテーション制があつた。

およそ、發展当初の資本主義的生産様式が歴史のうちに見いだす土地所有の形態は、資本主義に適応しないから、資本主義は、土地諸關係の古い形態——封建的地主的土地所有、農民的共同体的土地所有、氏族的土地所有、等々——から自分に適応した形態をみずからつくりだすのである。アメリカでは、この改造は、南部諸州の奴隸所有者経営にたいして暴力的に行われた。他方で、アメリカ大量の自由な土地にたいして、新しい生産様式のための（すなわち資本主義のための）新しい土地制度をつくり出すというこの役割をはたしたものは、「アメリカの黒い割替」、四〇年代の地代撤廃期成運動、ホームステッド法などであつた。就中、南北戦争による奴隸所有者大農場の粉碎およびホームステッド法は、他の先進諸国に存在しない二つの事情として、レーニンによつて評価されている。レーニンはいう、「合衆国には、他の先進諸国に存在しない二つの事情があつて、それが農業における企業数の増加を非常に強め、且つ促進している。それは第一に、南部においては奴隸を所有した大土地所有の分解が今日に至るまで行われ、黒人のみならず白人の農民もまた『植附ヶ地所有者』(Planter)の土地を少しづつ『買戻し』つつある

ことである。第二は、広大な面積に互る、占有されない、自由な土地が存在し、それが政府によつてすべての希望者に分譲されつつあることである。⁽¹⁴⁾と。

このような改造は、アメリカ資本主義的農業の発達を急テンポに早め、独立農民を自由な土地における自由な農業企業家に転化したのである。ところで、このような資本主義的進化は、アメリカ全部の地方によつての特徴ではなく、南部地方では、かつての奴隷制がながく遺制化し、資本主義の発達が、北部地方とくに西部にくらべて、緩慢に行われたのである。アメリカ合衆国は、「曾つて封建主義を識らず、その経済的遺制を有せざる国家である」という見解をしりぞけて、レーニンは、「これは頭から真理と矛盾する断定である。蓋し奴隷制度の経済的残存物は、封建的制度の経済的残存物と毫末も異なるところがないのみか、曾つて奴隷を所有せし合衆国の南部においては、これらの遺制が今日にいたるまで非常に強く残つている、⁽¹⁵⁾」といつてゐる。

だから十九世紀末合衆国借地諸関係の明白なる顕現および発達の歴史的意義についての検討にあたつては、奴隷制度の残存物が資本主義の発達と植民過程を阻止した南部におけるそれとそれらの障害なしに発達した北部および西部におけるそれとをそれぞれ別個に、なされなければならない。

(一) 先ず、南部地方から検討をはじめよう。

南北戦争は、南部農業に壊滅的な打撃を与えたとともに、四〇万の奴隷を解放して、南部の奴隷制プランテーション制度に終止符をうった。南部再建には二つの方向があつて、一つは、旧南部を革命的に改造しようという方向であり、もう一つの方向は旧南部を改良的に改造しようという方向であつた。⁽¹⁶⁾結局、改良の道が制覇し、ついに一八七六年に「南部の権力は、ふたたび完全に旧プランターの手にかへつた。それと併行して、プランテーション制

度は、北部資本の参加をもえて、奴隸制度の廢墟の上でクロッパ―小作制プランテーション制度へと、再編成されたのである。南部のプランター寡頭権力は、黒人たちを、プランテーション強制労働につなぎとめるために、黒人法 (Black codes) といわれるさまざまな黒人差別法その他の非民主的法律および方法を固定した⁽¹⁷⁾。事実「南北戦争後の『再建』時代のプランターの主要な經濟上の努力は、奴隸制度という現實の羈絆を解かれ脱して、プランテーションから流出せんとする黒人労働力を、元通りの劣悪な条件でプランテーションへ制縛せんとすることに集中された。かれらは一方で自由な形式の賃労働を拒否して、労働力のより固定的な小作制度を樹立しようとし、他方で、経営としても労働としても、より多く独立性を獲得しようとする普通の小作農形態を拒否して生産および生産物へのプランターの管理権を固持しようとした。クロッパ―制度は、そうした努力の中から、奴隸制度の残存物の上に、形成されたのである。むしろ、再建期の南部の貨幣の欠乏が、賃金形態を困難にした事實はあつたが⁽¹⁸⁾。

このように、南部においては、南北戦争によつて奴隸制大農場が粉碎されたが、南北戦争後「再建」期の挫折、いかえれば改良的方向にいわば「プロシヤ型」の制覇は、奴隸制にかえてクロッパ―制プランテーション制を出現せしめた。そして解放された黒人は、再び元通りの劣悪な条件で、奴隸からクロッパ―へ形態転化したけれども本質は以前と変わらず、プランテーションへ制縛されていつたのである。この制度、この農民について、レーニンは、こう指摘する。この小作制度の特質については、それは「封建制度の經濟的残存物と毫末も異なるところがない」「奴隸制度の經濟的残存物」であり、それが、「典型的にロシア的な、『純粹にロシア的な』雇役制度」であること、そして黒人小作農については、それは、「主として半封建的、或いは——經濟的關係においては——半奴隸的雇役農民である⁽¹⁹⁾」。さらに、レーニンは、この黒人小作農を北部および西部地方の獨立農民と比較してこう書いて

いる、「黒人に属する農民の数は一九一〇年に九二〇、八八三人、即ち全農民数の一四・五%であつた。農民総数のうち小作農民は三七・〇%、自作農民は六二・一%、残余の〇・九%は管理人の支配下に於く農民であつた。しかし白人にあつては小作農民は三九・二%を形成して居るに對して、黒人にあつては七五・三%である！アメリカにおける典型的な白人農民は自分の土地を所有する自作農民であり、典型的な黒人農民は——小作農民である。西部——新しい、自由な土地が存在する、小『独立農民』の極楽境たる……、植民された地方——においては、小作農民の比率は一四%である。北部では小作農民の比率は二六・五%であり、南部では四九・六%である！南部の農民の殆んど半数は——小作農民なのだ。」⁽²⁰⁾

さて、南部農業における資本主義の發達は、南北戦争後奴隸制が遺制化したところの『純粹にロシア的な』雇役制度（クローパー制プランテーション制）の經濟的基礎の上になされ、北部西部にくらべて緩慢であつた（南部農業の後進性）。このようないわば、プロシヤ型の發展途上において、解放された黒人がプランテーションに黒人小作農として制縛されていくプロセスが、一八八〇年以降の南部借地農の顕現および發達として顯著に現象化するのである。もつとも、南北戦争後数年間クローパー制と相並んでプランテーションに採用された『定額借地』および賃勞尙制が十九世紀終末にかけて序々に消滅していくことによつて現れた一八八〇年以降の借地諸關係の發達をも、かつテキサスのブラックプレーリおよび旧棉作地帯の北部地方で、白人農業者による借地が、黒人小作農地帯における速度と同一ではないとしても、一般に増大しつつあることによつて現れた借地諸關係の發達をも考慮せねばならないが。⁽²²⁾

以上要するに一八八〇年以降南部における借地諸關係の顕現および發達の歴史的意義は、「典型的にロシア的な、『純粹にロシア的な雇役制度』の經濟的基礎の上に生長した南部農業後進性のなかで、解放された黒人が元

通りの劣悪な条件でプランテーションに黑人小作農として制縛されていくことのうちに見出されるべきである。

(二) 北部および西部における資本の農業把握の方法は、前述の南部地方とは全く異なつて、すでに明らかなく、典型的に「アメリカ型」であつた。そしてこれらの地方においては、資本は、急速に、農業をつかみつつあつた。このプロセスにおいて、資本主義發達の作用によるところの一八七三年恐慌から一八八四、九三年の両恐慌を包含して) 一八九六年に至る期間は、その時代の政治經濟史上の先導的要因たるフォークナー (Harold U. Faulkner) のいう「農業不安」時代が含まれて⁽²³⁾いたことは、いうまでもない。

北部および西部地方におけるアメリカ型といわれるアメリカ資本主義的農業は、自由な土地の豊富な存在を基底となし、「巨大な土地資源から名目だけの価格で分譲され」た「自由な土地における——一方では、あらゆる中世的な束縛から、農奴制度と封建制度から自由な、他方では、私的土地所有の束縛から自由な、——そういう自由な土地における自由な農業企業家の自由な経営」を経済的基礎となし、その上で急速に發達したのである。このような自由な土地における自由な農業家の自由な経営⁽²⁴⁾ということは、ほかならぬ白杉庄一郎氏によつて、アメリカ型の道の特質として指摘されたものであり、アメリカ資本主義的農業の急速な發達のゆえんを説明するものである。

かかる自由な土地における自由な、アメリカ資本主義的農業企業家は、アメリカの典型的農民である自作農民であつた。この典型的な自作農民を確立するに大いに役立つたのは、ホームステッドに関する法律の發達である。しかしながら、この法律の發展は、借地諸關係の發達を完全におさえることは出来なかつた。たしかに、リヤンチェンコがいつているごとくに、「家産地に関する法律の發展は、最後には中および小農民所有者の土地所有を鞏固にすることを目的としていた。それはこの意味において、概して大きな意義をもつていたことを認めねばならない。

この法律のおかげで非常に多くの移民がこの国に惹き寄せられ、数において膨大な独立農民経営の部隊が確立された。とはいへ、家産地に関する法律は運用上しばしばその根本的目的とは反対の傾向を生み、その結果個人による土地の買収、投機および不正（特に期限前冗厩権に基いて）が盛んに行われるようになった。のみならず、個人または会社による土地の獲得および買収は面積に制限なく可能であつたから、遂には土地所有の分布の上に著しい不平等が発生し、自作農民経営と相並んで借地が著しく発達するにいたつた⁽²⁵⁾（傍点筆者）。

かくしてホームステッドに関する法律の発展は、ぼう大な独立農民を確立したが、他方では、自作農民経営と相並んで借地を著しく発達させたのである。しかし、この事実（借地の発達）は、ホームステッド法に関する法律の発展がアメリカの大量の『自由な土地』にたいして、新しい生産様式のための新しい土地制度をつくり出すという役割を果たしたという意義を否定するものではない。再び、アメリカにおける土地諸関係の発達を確認しておこう。

アメリカにおける土地諸関係の発達は、リヤシチェンコがいつているごとに、これを総括するにあつては、「それらは西歐諸国において複雑な長年月に亘る歴史的諸段階を通じて作り上げられた土地諸関係の諸類型とは、極めて著しく異なることを注意せねばならない。西歐諸国にとつては、すでに見たように、土地諸関係発達の主要な要素は何処においても、すでに封建的—農奴制的時代における以前の小独立生産者の土地収奪であり、被等の共同地の収奪であつた。かくてこの土地は、多かれ少なかれ巨大な特権的所有者の手中に移り、それと同時に被等の手中には社会経済的支配が確立された。

これに反して、合衆国においては植民地国家におけると同様に、近代の土地諸関係は形式上『自由な』土地の占有という土台の上に築き上げられた。これらの土地はこの国の植民の初期にはやはり土人に属し、被等から残酷に収奪したものであるが、しかし大部分は経済的には占有されていなかった。『自由な』土地として国有財産に編入されたこれらの土地は、植民の主要な

基礎でもあつたし、國家經濟および財政々策の主要な基礎でもあつた。これらの『自由な』国有地の植民、分譲および眞の掠奪は、此処ではその後の一般經濟的發展において、『本源的蓄積において』、商業および工業資本主義の發達において、ヨーロッパの国有地の掠奪や共同地の『困い込み』と同様に決定的な要素として役立った。しかしこの歴史的過程は此処では、苦痛に充ちた歴史的諸段階を通過せずして、一層容易に且つ直線的に行われ、従つて、遙かに急速に農業における資本主義的諸關係の確立に導いた。農業經營の純資本主義的組織——むろん時代と場所とを異にするに従つて種々の形態をとるところの——はここではその最も完成された表現を得、歴史的な残存物、諸傾向および諸理論に何ら余地をも残さなかつた。農業はその發展、傾向、外的および内的な社會經濟的諸關係において、合衆國の一般資本主義的發達の不可分の一環となり、その發展と共にあらゆる典型的發展段階を通過した⁽²⁶⁾。

このようなアメリカにおける土地諸關係の發達は、アメリカにおいての基本型であつて、借地諸關係の發達は、「これとは全然事情を異にする。借地諸關係は大多数の場合、鉄道、林業、畜産その他の大会社の土地の上で發生した」ものである⁽²⁷⁾。ところで、この借地諸關係は、近代借地諸關係ではないことについて、レーニンは、書いている。「アメリカにはヨーロッパ的な、文化的な、近代資本主義的な意味における小作農民なるものは存在しない。アメリカにはヨーロッパ的な、文化的な、近代資本主義的な意味における小作農民なるものは存在しない。此処にあるのは、主として半封建的、或いは——經濟的關係においては——半奴隸的雇役農民である。『自由なる』西部においても小作農民の可なり大きい部分は雇役農民である（五万三千人のうち二万五千人）。古い、昔から植民された北部では、七十六万六千人の小作農民のうち——四十八万三千人即ち六三％は雇役農民である。南部では百五十三万七千人のうち百二万一千人即ち六六％は雇役農民である」と⁽²⁸⁾。

以上要するに、アメリカの大量の『自由な』土地にたいして、新しい生産様式式のための（資本主義のための）、役割を果したのは、アメリカの黒い割替、四〇年代の地代撤廢期成運動、ホームステッド法などであつた。かくして

成立したアメリカにおける新しい土地制度Ⅱ土地諸関係の発達とは、別個に、借地諸関係が発達したのである。そしてこれは、近代的Ⅱ資本主義的借地諸関係の発達ではなかつたといわれる。ここに、合衆国における北部および西部における十九世紀末借地諸関係の顕現および発達の歴史的意義が見出されるであろう。

しかして、十九世紀末合衆国における借地諸関係の明白な顕現および発達の歴史的意義は、次のことのうちにある。アメリカ型の道といわれるアメリカ資本主義的農業の急速な発達の道をはき清めおよびこれに役立つたのは、一方で、南部の奴隷制の粉碎、他方でホームステッド法などであつたが、(1)南部ではアメリカ型の進化のための改造は途中で挫折して、「典型的にロシア的な、『純粹にロシア的な』「雇役制度」が発達したこと、(2)北部および西部では、アメリカ型の進化のための新しい土地所有諸関係が典型的に発達し、これとは別個に借地諸関係が発達したこと、これである。そして南部の農民は、黒人小作農(本質的に雇役農民)であり、北部および西部の農民は、典型的なアメリカ農民、白人自作農業者であつたのである。

では、北部西部での借地諸関係の発達は、アメリカ型のブルジョアの進化または新しい土地諸関係の発達との関連においていかなる意義をもつであろうか。これの観察により、アメリカ資本主義的農業の進化のうちで、明白に顕現し発達した諸地諸関係の歴史的意義を明らかにしておこう。次にこれを観察しよう。

註(14) 直井武夫訳、農業に於ける資本主義、二五六頁。

(15) 同書、一〇九頁。

(16) 菊地謙一、アメリカにおける前資本制遺制、四八―四九頁。

(17) 同書、五一頁。

(18) 同書、二〇四頁。

十九世紀末合衆国借地諸關係の發達（東井）

五二

- (19) 直井訳、農業に於ける資本主義、一〇九—一一二頁。
- (20) 同書、一一一頁。
- (21) William Bennett Bizzell, *Farm Tenantry in the United States*, 1921, Pp. 262-5.
- (22) Henry C. Taylor, *Outlines of Agricultural Economics*, 1949, Pp. 308-309.
- (23) Harold U. Faulkner, *Economic History of the United States*, 1950, Pp. 261-273.
- (24) 白杉庄一郎著、近世西洋經濟史研究序説、三四二—三五五頁。
- (25) リヤンチエンコ、農業經濟學上、二八三頁。
- (26) 同書、二八七—二八八頁。
- (27) 同書、二八九頁。
- (28) 直井訳、農業に於ける資本主義、一一一—一二二頁。

四

十九世紀末合衆国借地諸關係の顯現および發達は、これの歴史的段階との関連において、どのような歴史的意義をもつものであろうか。

借地農が、その普及率において、その増加率において南部に次いでもつとも顕著な地方は、東北中央部地方および西北中央部地方であつた。だから、これら地方を一括した北中央部または中央西部地方において、十九世紀末借地諸關係の明白な顯現および發達の歴史的意義を検討しよう。

先ず第一に、北中央部地方における借地諸關係の顯現および發達は、「小農民の搾取に対する資本主義の傾向」の作用による農民の零落—隸屬化過程にほかならないであろう。

合衆国農業機械は、その製造において、その普及において、一八六〇年以降急速に発達したのである。この諸結果の一つとしてアメリカの経済史家たちは、借地農もしくは農業賃労働者の増加を指摘している。例えば、フォークナーは、「高価な機械が当時の流行となりつつあつた穀物諸州においては、資本をもつ人は、明らかに有利であつた。その結果、比較的貧乏な農民は、借地農もしくは農業賃労働者の身分まで引下げられた。」⁽²⁹⁾といい、F・A・シャノン (Fred A. Shannon) は、「次のごとくいつている、「機械費用は、他の要因と相まつて、自作農業者の比率を引下げて、借地農および農業賃労働者を増大せしめた。余りも貧しいか余りにも保守的であるので、新しい機械を獲得できない人たち、およびつかの間の繁栄期に余りにも経営を拡大した他の人たちは、土地独占家による犠牲者の仲間入りをしたのであつた。そして土地にとどまつたこれらの人たちは、もはや、自由な企業家ではなかつた。一八八〇—一九〇〇年において、ぼう大な機械が使用された北中央諸州では借地農が顕著に増加した。例えば、すでに大農業人口をかかえていたカンサスでは、全農業者に対する借地農比率は一六・三から三五・二へ、その差一八・九増加した。」⁽³⁰⁾と。

かかる農業機械革命は、借地農もしくは農業賃労働者を増加せしめつつあつたが、この増加にさらに拍車をかけたのは土地価格の上昇であつた。土地価格は、農産物価格の下落にもかかわらず、上昇したのであつた。「南北戦争の終えんから一八九六年に至るまでのたいの年には異常なまでに不景気を体験したのである。政府の寛大なる土地政策は機械化の増進や肥料利用の増大と相まつて農産物の過剰生産を惹起せしめたのであつた」。実に、「農産物の過剰生産は、シャープな価格下落を惹起した。小麦価格は、一八八六年の一ブッシェル二・〇六ドルから一八九六年の七二セントへ、とうもろこしは、一ブッシェル六六セントから二一セントへ低下した」。この物価

下落にもかかわらず、農地価格は、騰貴したのであつた、「一八六〇年の一エーカー当り一六・三〇ドルから一九〇〇年の一エーカー当り一九・八〇ドルへと騰貴、ピークは一八九〇年の二一・三〇ドルであつた」。土地価格の上昇は、「農業機械化による投資の増大と相まつて、ますます農場負債を生ぜしめて、低下しつつある農産物価格で経営する農業者が一定の利子支払をなすことを不可能とした。農場負債は、一八九〇年におよそ一農場当り、一、二〇〇ドルであり、土地建物資産価額の約三分の一であつた」⁽³¹⁾。

かくして南北戦争以降の農業機械および土地価格の騰貴が、独立農民を没落さし、借地農もしくは、賃労働者を顕現せしめたのである。そしてこれは、南北戦争以降のアメリカ型の道によつて特徴づけられるアメリカ資本主義的農業の發達において資本主義一般の基本法則（大生産が小生産を駆逐するということ）の作用によるものであることは、いうまでもない。そしてまた、これは、殊に北中央部諸州において、南部地帯に次いでもつとも明白にして顕著な借地諸關係の發達のうちによく具体的に現れたのであつた。

この「小農民の搾取に対する資本主義の傾向」の作用による農民の零落—隸屬化過程たる借地諸關係發達を緩和しつつあるのは、合衆国の特殊性、すなわち未だ占有されざる、自由の土地の存在ということである。これについて、レーニンは書いている。

「われわれはこの北部において、われわれがすでに屢々指摘したところの合衆国の特殊性、即ち未だ占有されざる、自由の土地の存在を、極めて一目瞭然と観るのである。一方では、この特殊性は、アメリカにおける極めて広汎にして急速なる資本主義の發達を説明するものである。この広大な国の若干の地方において、土地私有権が缺如していることは資本主義を取除く所似ではなくて、……反対に、資本主義の發展を促進するところの基礎を押し拡げる所似である。他方、ヨーロッパの古い、

開化した、資本主義的諸国家には見ることでできぬ、この特殊性は、アメリカにおいて、すでに開化した、最も工業的な地方において行われつつあるところの、小農民の搾取の過程を掩い隠すことに役立つているのである。

『北部』を形成する四つの地方のうちの一つ、即ち中央北西部地方においては、今日に至るまで農園 (Homestead) の譲与が行われていることである。一九〇一年から一九一〇年までのあいだに譲与されたこれらの農園の面積は、総てで五千四百万エーカーに達する。

小農民の搾取に対する資本主義の傾向が如何に恐ろしき力を以つて作用しつつあるかは、アメリカの『北部』において、数千万エーカーの占有されざる、自由の土地が分与されているにもかかわらず、土地所有者の数が絶対的に減少しつつある事実を以つても知ることができる。

僅かに二つの事情が合衆国におけるこの傾向を今なお緩和しつつある。即ち第一には、南部において、未だ分解されない、奴隷を所有する植附ケ地 (plantation) が存在することである。此処には鞭打たれ、蔑まされた黒人が多数存在する。第二には未だ植民されない西部の存在である。この二つの事情は相俟つて、資本主義のために将来の基礎を拡大し、一層広汎な、一層急速な資本主義の発展のための条件を用意しつつあることは明白である。」と⁽³²⁾。

かくして、アメリカ資本主義的農業の急速な発達の中で、資本主義一般の基本法則(大生産による小生産の駆逐)の作用によつて、アメリカの典型的農民(自己の土地を所有して自ら耕作する農民)は、分化・分解をとげて、没落して、一八八〇年以降の借地諸関係を明白に顕現さし、発達させたのであり、この事情を緩和しつつあるのは、合衆国の特殊性(未だ占有されざる、自由の土地の存在)であつた。ここに、先ず主題の歴史的意義が見だされるであらう。

第二に、北中央部地方において明白に顕現し発達した借地諸関係のなかに、近代の資本主義的借地農の成立の

動きが、見られることである。

十九世紀末合衆国借地諸關係の發達は、一般的にいえば、近代的に資本主義的なそれではなかつた。イギリスでは、「殆んど十六世紀全体（とはいえ最後の二三十年を除く）にわたつて続いた農業革命は、農村民を貧困化したのと同じ速さで借地農業者を富裕化した」のであるが、合衆国では、一般的には、農業革命は、借地農業者を富裕化にはしなかつた。合衆国においては、イギリスにおいて富裕な資本制的借地農業者なる一階級を存立せしめた決定要因に長期借地契約がなかつたのである。合衆国借地農は、短期借地である。それも年極め借地である。この借地形態は、小さな地所を多くの場合一年期限で金納小作または分益小作で貸しつけるところの若干の借地形態であつて、純粹の資本主義的性質をもたないのであつた。だから、レーニンは、昔から植民された北部では小作農民のうち六三〇は雇役農民であるといつたのである。

しかし、北中央部地方における借地諸關係の發達には、一般的にはこのような純粹な資本主義的借地でない借地があつたが、これとは別に資本主義的借地の成立への動きが特殊的に見だされるのである。

すでに見たごとく南北戦争以降においては、農業機械革命、土地価格の上昇、農業恐慌などが相まつて、合衆国の典型的農民に自作農業者を分化・分解せしめたのであり、この分化・分解によつて、資本家と賃労働者が析出したのである。従つて十九世紀末においては、すでに、地主、資本主義的借地農、農業賃労働者の三つの階級が形式的に對立して現れつつあつたのである。もつとも、このような對立を、西部地の存在は、固定化しなかつたけれども、こうした資本主義的借地農は、合衆国では、経営の拡大にあつては、アメリカの典型的農民たる小独立農民は、「現実の生産過程に必要なますます大なる資金をえるために土地所有權の有する舊物から『資本』をひきあげ

ること」になつたのはもつともである。⁽³⁴⁾かくして、独立農民は、資本をますます土地からひきあげて、全ての経営設備に資本をますます投下することになり、自小作農民に形態転化して資本主義的農業生産の発達に対応したのであつた。しかしこの動きは、合衆国小作統計が自小作農を土地所有者として計上したために、小作統計によつて明らかになされがたい。ところで、かかる動き（土地所有の贅物からの資本のひきあげ）は、他方で、資本主義的借地農を成立せしめことは、事実である。例えば、ノーオスダゴダの借地農は、「しばしば土地所有者と同様に独立的であつて、彼がどのような作物を植えるかを決意し、彼の農場経営を計画し、負債から自由な家畜および道具を所有し、全く自由な意思で購販購入し一千ドルないし数千ドルの価値ある土地資産を所有し、おそらく、二五ドルも価値する農場を管理している。」⁽³⁵⁾のである。

かくのごとく、主要穀物諸州である北中央部地方では、借地による資本主義的農業の発達が見られたのであり、これが、この地方における借地諸関係の発達のなかに見だされるのである。とはいへ、合衆国の特殊性、自由な土地の存在は、このような資本主義的借地諸関係の発達を微弱たらしめていたのである。

以上、要するに、アメリカ資本主義的農業の急速な発展途上において、資本主義一般の基本法則（大生産による小生産の駆逐）の作用によつて、アメリカの典型的な農民は、分化・分解をとげて、没落して借地諸関係を顕現し発達せしめたのである。この没落を緩和しつつあつたのは、合衆国の特殊性（未だ占有されざる自由の土地の存在）であつたのであるが、それにもかかわらずおそろしき力を以つて作用しつつある資本主義一般の基本法則による独立農民の没落がはげしかつたために、明白に借地諸関係が顕現し、発達するところとなつたのである。そしてこれは、合衆国の北中央部地方においてももつとも如実に展開されたのである。そしてここに、われわれの主題の歴史的意義

を見出すことが出来たのである。この借地諸關係の發達には、たとえ微弱な現れであつたとはいえ、この国の急速な資本主義的進化的なかでの、ブルジョアの借地諸關係が現れていることを見失つてはいけぬ。

註(26) Harold. U. Faulkner, *American Economic History*, 1949, P. 381.

(27) Fred A. Shannon, *The Farmer's Last Frontier*, 1945, P. 146.

(28) E. A. Johnson and H. E. Kross, *The Origins and Development of the American Economy*, 1953, Pp. 270-272.

(29) 直井訳、農業に於ける資本主義、二四三—二四五頁。

(30) イギリスでは、「十五世紀の最後の三分の一期に始まり、殆んど十六世紀全体(とはいえ最後の二三十年を除く)にわたつて続いた農業革命は、農村民を貧困化したのと同じ速さで借地農業者を富裕化した」。『十六世紀には決定的に重要な一契機がつけ加はつた。当時には借地契約が長期で九十九カ年というのも屢々あつた。貴金屬したがつて価値の継続的減少は、借地農者に黄金の果実をもたらした…。だから、イギリスが十六世紀末に当時の事情からみて富裕な『資本制的借地農業者』なる一階級が有したのは、不思議でない。』長谷部文雄訳、マルクス資本論、第一部下、一一三三頁。

(31) Anna Rochester, *Why Farmers Are poor*, 1940, Pp. 135-136.

(32) B. H. Hibbard, *Agricultural Economics*, 1948, P. 206.